



沖縄側から見た奄美の文化変容

著者	津波 高志
内容記述	この博士論文は内容の要約のみ公表しています
発行年	2014
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2013
報告番号	12102乙第2677号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00124420

論文要旨

沖縄側から見た奄美の文化変容

津波 高志

I. 構成

序章 奄美の文化変容

第1部 葬制と墓制

第1章 与論島における洗骨改葬

第2章 奄美における葬送儀礼の外部化

第2部 組み相撲と立ち会い相撲

第3章 伊波普猷の見た奄美の相撲

第4章 奄美における大和相撲の受容過程

第3部 女性神役の継承

第5章 大和村名音の神役継承関連文書

第6章 奄美における女性神役の継承方式

終章 奄沖文化

引用文献

II. 要旨

序章 奄美の文化変容

慶長14（1609）年の薩摩藩の琉球王国侵攻後、奄美諸島は王国から切り離され、薩摩の直接支配を受けた。そして、明治4（1871）年の廃藩置県で大島郡として鹿児島県に組み込まれた。その一方で、琉球王国の他の地域は王国を存続させたまま間接支配を受け、明治5（1872）年に琉球藩とされ、明治12（1879）年の琉球処分によって沖縄県の誕生となった。薩摩による直接支配と間接支配という支配構造の違い、およ

び廃藩置県と琉球処分による県域の違いは、米軍支配による戦後の一時期を除いて、ほぼ400年間も奄美と沖縄を隔てたことになる。

いかなる文化も変化するのであり、約400年もの間、奄美と沖縄におけるかつての文化がそっくりそのまま維持され今日に至っているはずはないであろう。しかし、不思議なことに、薩摩・鹿児島との長期的継続的直接接触によって奄美の文化がいかに変化したのかということに関する本格的研究は見当たらない。本論は同じ琉球文化の系譜を引く沖縄側から見た奄美の文化変容(acculturation)に関する研究であり、幾つかの分野にわたってその具体相を明らかにすることによって、研究史上の空白を埋め、かつそれを琉球弧全体の文化の研究に位置づけることを目的にしている。

その文化変容の研究においては、薩摩・鹿児島の影響で文化変化の起きたことが客観的に確実であると見なしうる根拠が提示されねばならない。つまり、単に鹿児島と奄美の今日的な文化的類似性の指摘に止まるのではなく、文書や図像などの資料も用いて、どの時期に、どのように影響を受け、どのような変化の過程を経たのかといった点が具体的に示されねばならないのである。

本論では、その条件をある程度まで満たしていると思われる材料を3部に分けて取り上げる。第1部は奄美の葬制や墓制、第2部は相撲というスポーツ文化、第3部は村落祭祀の儀礼を施行する女性神役の継承方式である。

第1部 葬制と墓制

「第1章 与論島における洗骨改葬」では、2007年現在における与論島の洗骨改葬の状況を報告し、それに対応する墓制を整理した上で、明治初期の鹿児島県庁による風葬禁止の論達から現在までの葬墓制の変容過程を記述している。

それは第一次葬も第二次葬も風葬だった状態から、第一次葬は土葬に変わり、第二次葬は風葬の伝統を引き継いだまま納骨施設のみの変化、すなわち洞穴、甕、石塔納骨堂への変化だったのである。

また、石塔納骨堂の外形は鹿児島的であるものの、内部には絶妙に琉球文化的要素が組み込まれている。

「第2章 奄美における葬送儀礼の外部化」では、火葬の導入と普及は地域社会の人々の手で行われていた葬送儀礼の少なくとも一部を外部の専門家にゆだねるようになる、すなわち葬送儀礼の外部化が起きる、とする指摘を大和村津名久の事例でその導入の時期と絡めて検討している。

津名久の事例にさらに他の事例や文献などを加え、奄美諸島において葬送儀礼の外部化は薩摩・鹿児島側からの影響で火葬の導入以前にも起きていたこと、つまり近世末期から近代初期にかけて奄美では風葬から土葬に変わり、それに神官や僧侶などの宗教者の関与も加わったことを明らかにしている。火葬の導入に伴う葬送儀礼の外部化はそのとおりであるにしても、奄美においては土葬に伴う葬送儀礼の外部化の約1世紀後に二度目の外部化として起きているのである。

それに対して、沖縄側では土葬そのものが行われておらず、それに伴う葬送儀礼の外部化も起きていない。琉球弧の文化、特にその変化の側面を奄美諸島において把握するに際しては、一般的な地域差もさることながら、薩摩・鹿児島側からの影響も常に考慮されね

ばならない。葬送儀礼の外部化に関しても、当然その例外ではないのである。

第2部 組み相撲と立ち会い相撲

「第3章 伊波普猷の見た奄美の相撲」では、伊波が奄美の相撲を誤解していたことを明らかにした上で、今後の研究の展開を考えている。昭和8年、伊波は奄美と沖縄で共通の文化要素は薩摩によって奄美が切り離される以前からのもので、奄美にはなく、沖縄にだけある文化要素は切り離された後のものであると見なしている。そして、相撲は前者で空手は後者だとしている。しかし、奄美の同時代の研究者による成果に照らせば、その相撲の捉え方は誤りである。

今後の研究のあり方として、伊波とは異なる別の説明方法もありうる。そして、実際にそれを展開することの方がよほど重要である。たとえ、薩摩侵攻以前は奄美と沖縄で同じであっても、それ以後に異化へと進む文化変化が起きていても当然であろうとの仮説的見通しを持つことが、今日における奄美・沖縄の文化研究にとっては、はるかに有効だと思われる。

「第4章 奄美における大和相撲の受容過程」では、奄美において沖縄と同じように砂上で最初から組み合って、相手の背中を地につければ勝ちとする三本勝負の相撲が本土と同じように土俵上で立ち会う一本勝負の相撲へと変化してきた過程を追求している。

土地の人々の記憶や伝承および写真や図像などを総合的に検討すると、奄美の北の諸島の広域相撲大会では薩摩の役人達の影響で1800年代前半あたりから外形は普通の土俵のように見えるが、実は俵の内側の円形部分には砂が入っている「土砂俵」（「土俵」ではない）で三本勝負の立ち会い相撲が行われた。そして、戦前までそれが続き、戦後になって「土俵」上の三本勝負となり、昭和33年から一本勝負になった過程が浮かび上がってくる。

北の諸島の集落相撲では、戦後まで砂上に太い縄を円形に半分だけ埋めた「砂俵」（「土俵」ではない）で立ち会う三本勝負が行われたが、広域相撲の影響を受けて、土俵上での三本勝負、そして一本勝負へと変化した。

徳之島以南の三島では戦後じきまで沖縄とまったく同じ組み相撲が行われていた。しかし、大島郡全体の広域相撲大会への参加を通して、仕切って立ち会う大和相撲に変わっていった。

結局、大和相撲一色の奄美と沖縄相撲と大和相撲の並存する沖縄という今日の琉球弧における相撲の分布状況を生み出した根本的な要因は、薩摩侵攻によってなされた奄美と沖縄の間の歴史的・政治的線引きだったのである。それ自体は直ちに文化的線引きにはならないにしても、さすがに400年間も経過すると、そうなってしまうのである。

第3部 女性神役の継承

「第5章 大和村名音の神役継承関連文書」では、大和村名音で私が見つけた神役（村落祭祀における儀礼の施行者）の継承に関する二つの文書を紹介し、研究史上の意義について述べている。

その意義とは、まず特定の神役は屋号や姓が前についた〇〇ビキと称される父系家筋集団によって継承されることが男性神役については明治29年まで遡って確認可能なことで

ある。また、女性神役については夫側の集団の神役を継承する現行の方式が昭和14年の時点でも確認でき、嫁による継承が既に指摘されている人口流出や神役就任忌避傾向などとは無関係であると判明すると同時に、それが他の地域にも適用できる可能性があることなどである。

「第6章 奄美における女性神役の継承方式」では、旧名瀬市・大和村・加計呂麻島における女性神役の継承方式を類別的に捉え直し、かつ類別間の数量的関係の時代的变化まで把握した上で、その変化の要因が薩摩直接支配にあったことを明らかにしている。

奄美における女性神役はヒキと称される集団によって継承されている。ただし、女性の婚姻後のヒキ集団への所属と神役の継承方式とで分類すると次の三とおりとなる。すなわち、父系血筋型（女性が婚姻後も父方を辿ってヒキ集団に所属し、神役の継承もその集団内でなされるもの）、父系家筋型（女性が婚姻後は夫方のヒキ集団に所属を変え、神役の継承もその集団内で行われるもの）、家血並存型（女性のヒキ集団への所属は父系家筋的になされ、神役の継承は父系血筋的になされるもの）である。

数量的には11例中8例が父系家筋型で、家血並存型が2例、父系血筋型は1例である。父系家筋型の一般的な型では、特定ヒキ集団の嫁がその集団の継承する神役の後継候補者であり、その中から霊的職能者の判示によって後継者が決定される。従って、前任者と後継者の系譜的關係は問題とならない。それに照らせば、系譜的關係の追求に終始した従来の研究は妥当性を持たない。

ただし、今日一般的な家筋型は古琉球の頃のノロ辞令書にはまったく見当たらず、血筋型しかない。その逆転は、歴史学の研究を参考にすると、18世紀初頭の喜界島代官による継承方式の規定ないしその類の文化が影響したと考えられる。

終章 奄沖文化

奄美における文化変容の具体相を3部に分けて取り上げてきた。第1部では風葬から土葬へ、第2部では組み相撲から立ち会い相撲へ、第3部では女性神役の父系血筋的継承から父系家筋的継承へ、それぞれ薩摩・鹿児島の影響で変化したことを明らかにした。

それらは沖縄では見られない変化である。しかし、例えば与論では第一次葬の土葬は受容しても、洗骨改葬は継続した。そのように、奄美では薩摩・鹿児島の文化に同化したのではなく、その影響を受け、一部受容しつつも、それを従前の枠組みで再統合しながら独特の奄美文化を成立させている。

今やかつての琉球文化は奄美文化と沖縄文化に分枝している。それを認めた上で、琉球文化の系譜を引くものとして両者を一括りにする際には、奄美文化と沖縄文化を対等なものとし、奄美沖縄文化、略して奄沖文化と捉えることが必要である。人口規模や行政単位の規模ではなく、文化の単位として奄美を捉えることによって、研究上の通過地点としての「道之島」にせず、沖縄の「附録」の位置に置き去りにせず、改めて「兄弟島」にすることが可能である。